慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	クセノフオンの諸著に現れたる経済思想
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.11 (1918. 11) ,p.1563(77)- 1587(101)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19181101-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

（廣告主へ御注文の節は三田學會雜誌廣告に依る旨御附記を望む）

傷害保險兼營

普通傷害保險
海陸旅行傷害保險
●地陸上旅行傷害保險

料率低廉　契約簡便　切符販賣

東京市日本橋區本革屋町五番地（三井銀行横）

共同火災保險株式會社

營業種類　火災保險、海上保險、運輸保險、傷害保險

營業部支店所在　東京、大阪、京都横濱名古屋神戸、仙臺福岡、金澤、京城

雜錄

クセノフオンの諸著に現れたる經濟思想

高橋誠一郎

一

Xenophon（Ξενοφῶν）は凡西紀前四百四十四年を以て雅典なる Erchia 邑に生れ、九十餘年の生涯を送りて、三百五十五年の頃に逝けりと傳へらるゝも、其出生及び死去の精確なる年月は共に定かならず。彼の父 Gryllus はおそらく裕福なる地位の人たりしなる可く、Xenophon 亦雅典紳士の一般教育を受けたること疑なきが如し。彼は大哲 Socrates を圍みて集れる若き群の一人なりき。Xenophon が初て其師を見たるは、とある細徑なりき。Socrates は彼が風姿の謙讓秀麗なるを喜び、戯に其杖を差延べて彼の行手を遮ると同時に、人は何處に糧を求む可きやを彼に問へり。Xenophon が之に答ふるや、彼は更に人は何處に德と譽とを修め得可きやを問へり。Socrates は青年の答に躊躇するを見て、之に謂ひて曰く、然らば余に隨ひて教を受けよと（Diogenes Laertius. ii. 48.）。西紀前四百二十四年 Delium に於ける雅典人と Boeotia 人との戰に臨める Xenophon が雅典軍の敗走に際して落馬せるを見たる Socrates は、彼を其肩に負ひて數ステデュームを走れりと云ふ（前掲 Diog. Laert. 並に Strabo, lib. ix. c. i.）。一說に Xenophon は暫く捕虜として Boeotia 人の間に在りしと云ふ。彼が Proxenus の知己たるに至りしは此時代なりしなる可く、兩者は偕に詭辯學者 Prodicus の講莚に列せりと傳へらる。又一說に彼は Iso-

crates の學徒たりしと云ふも固より信ず可らざるが如し（Krüger, De Xenoph. Vitâ Quaestt. p. 17; Photius, Bibliothecc lx.）

Peloponnesus 戰爭結局後、幾許ならずして Xenophon は Proxinus の勸誘に由りて小 Kuros (Cyrus) が陽に Pisidia 人に對するの態を裝へる其同胞 Artaxerxes Mnemon 王に對する遠征隊に加はることゝ爲れり。蓋 Proxinus が Sardis の陣營より彼に書を寄せて、彼にして若し此地に到らば、彼を Kuros に紹介す可きの約諾を與へたるに因るなり。Xenophon は此書を披見すると共に之が旅程に上るの可否を Socrates に諮る。Socrates は Kuros が Laconia 人の味方にして雅典の敵なりと看做されたるが爲に、Xenophon にして彼に隨從せんか、彼を以て其國家に背く者として求刑するの根據を形成することある可きを惧れ Delphi の神託を仰ぐ可きを慫慂せり。於是 Xenophon は Delphi に赴き、最も光榮に且つ多幸に其熟圖せる旅程を經て、而して首尾好く之を成就して後、恙なく歸國するを得るが爲には孰れの神々に贄を供へて祈願す可きやを Apollo の託宣に俟つ。Apollo 彼に答へて曰く、彼に取りて犧牲を献ぐるの適當なる神々に對して之を爲す可しと。Xenophon 歸りて神託を其師に告ぐ。Socrates 之を聽きて、彼が先づ第一に神に向ひて往く可きや停る可きやを問はず、却つて既に赴く可きを自ら決するものあるが故に、單に其最良の方法を求めたることを責む。而も彼曰く、然れども斯くの如く託宣を仰ぎたる以上は、神の示す所を行はざる可らずと。於是 Xenophon は Apollo の命じたる神々に贄を捧げて出帆し、Sardis に於て將に軍を進めんとしつゝありし Proxenus 及び Kuros を見る。Kuros は其の遠征の目的を秘し、之が終結と共に直に歸國せしめらる可きを約して Proxenus と共に彼に從軍を慫慂す。Xenophon は固より之を容れて遠征軍に加りたるも、而も彼が軍中に於ける地位は將官、士官乃至兵士の孰れの性質をも具有せざりき。Cilicia に達するに及び遠征の目的は何人にも明瞭と爲るに至りしが而も彼等の大部分は相互に其怯懦を嗤笑せらるゝを忌みたると、Kuros に對して忘恩の謗を受くるを憚りたるが爲に、心ならずも之に從ひ行けり。而して Xenophon も亦其一人なりき（Anabasis, III. i. 4-10）。

Kuros が西紀前四百〇一年 Cunaxa の戰に斃れ、而して希臘の將官等が Tissaphernes の不信に由りて縛せらるるに及び、希臘軍は其指揮者を失ふに至れり。彼は Artaxerxes 王の傳令として希臘軍の武裝を解き、王の軍門に降る可きを命じたる希臘人 Phalinus に回答するの任に當り、軈て士官等の會議に由り、等しく Tissaphernes の詭計に捕へられたる Proxenus に代りて其指揮官に擧げられ、幾許ならずして全軍總師の能力を認めらるゝに至れり。（Anab. I. viii. 27. II. v. 32. II. i. 7. III. i. 15-47）。彼が大なる能力と成功とを以て嚴冬の氷雪を冒して Armenia の漠原と兇猛なる山間の蠻夷との間を通じ一千五百哩に亘れる退軍に際し一萬の軍隊を指揮したる顚末は事細く Anabasis 中に記述せられたり。希臘軍は五ヶ月にして小亞細亞なる其植民地 Trapezus (Trebizond) に達したる後、三百九十九年 Byzantium の對岸なる Chrysopolis (Scutari) に導かれ、而して其一部は Thrace 王 Seuthes の爲に服務せしが、彼等は彼の爲に從事せる所のものを遂行せる後、辛じて王が彼等に約したる報酬の一部を受くることを得たり。而も彼等は王との協定を終るや、直に Sparta によりて招

致せられ、かの Tissaphernes 及び Bithynia の太守 Pharnabazus と戰ひつゝありし Thibron の軍に連結し、西紀前三百九十九年 Xenophon は生殘せる「一萬」の殆ど全部を其の指揮の下に委ねたり。而も已に彼の資源は空竭せるを以て Asidates と稱する波斯人の邸宅を襲擊し、彼及び其妻子を捕獲し、其馬匹並に財產の全部を略取せり (Anab. VII. i. 5, ii. 10, vii. 55, vi. 1, 7, viii. 24, 22.)。斯る間に Socrates は其死に就けるなり。

Xenophon は亞細亞より歸るや直に公然故國に入らんとしつゝありしが時會、雅典に於て彼に對する追放の決議通過せりとの報に接せり。蓋彼が Peloponnesus 戰爭に際し Sparta 人の味方たりし Kuros に援助を與へたりとの理由に基くものなり。(Anab. VII. vii. 57; Pausanias V. vi. 4; Diog. Laert. ii. 51.)。是が爲に彼は Thibron 及び其後繼者 Dercyllidas と共に亞細亞に留り、而しておそらくは Κυρεῖοι の指揮官として活動せるなる可しと想定せらる (Küllner, Prolegomena in Anab. p. v; Krüger, Quaestt. p. 21)。西紀前三百九十六年彼は Sparta 王 Agesilaus と共に其波斯に對する出征に際して亞細亞に在り、而して Agesilaus が雅典 Corinth 及び Boeotia の排 Sparta 同盟に對し其邦家を防護するが爲に軍を返すに及び、彼は王に隨ひて三百九十四年 Coroneia の役に參加し其故國と之が同盟國とを擊破せり (Anab. V. iii. 6.)。此戰役の後、Sparta 人はおそらく Agesilaus の意見に由れるなる可し、Olympia 附近なる其植民地 Scillus なる Elis の町に邸宅と知行とを Xenophon に與へたり。彼は此處に其後妻 Philesia 及び Agesilaus の勸告に因りて Sparta に於て敎育せられつゝありし其二子 Gryllus 並に Diodorus を呼び迎へたり。彼は又此處に其 Agesilaus に隨ひて亞細亞より Boeotia に赴くの時、Ephesus に蓄積せる分捕品を以て Diana 女神の殿堂を建造せり。彼は Anabasis 中に於て其の居住地の光景を記せり (Anab. V. iii. 7-13; Diog. Laert. I. d, ii. 52; Plutarch, Agesilaus. 20)、彼は西紀前三百七十一年 Leuctra の戰に於ける Sparta 敗北後 Eleia 人が Scyllus の所有を回復するに至る迄、二十年以上此地の居住を續けたるが如し。彼が著書の大部分は此地に於ける幽居中に成りしものなり。Xenophon は其子と共に先づ Lepreum に遁れ、次で Corinth に赴き、此處に其餘生を終る可き寓居を定めたり (Krüger, Quaestt. p. 26; Diog. Laert. ii. 53.)。西紀前三百六十九年雅典人が Thebae 人の爲に其領地を侵略せられつゝありし Sparta を援助せんとするに及び、Xenophon は其二子を派して Sparta の爲に戰はしめたりと云ふ。其後七年長子 Gryllus は Mantineia の役に於て敵帥 Epaminondas を斃したる後、陣歿せり。Xenophon は恰も神に犧牲を捧げんとしつゝあるの時、其子戰死の報を受けたり、而して直に其頭より花圈を脫したるが、彼が死の花々しかりしを聞くに及びて再び之を被れりと謂ふ。或は又彼が一滴の涙をも流すことなくして、單に彼は其子を死す可く生めることを知ると言へりと傳ふ (Diog. Laert. ii. 53)。Xenophon 追放の命令は之が發案者たりし Eubulus の動議に由りて撤回せられたりと傳へらるゝも、其年月は明ならず（或は謂ふ、凡西紀前三百六十九年と、Krüger, Quaestt. p. 27.)。而も彼は再び故國の土を踏むことなかりしが如し。

Xenophon と Platon との間に激甚なる拮抗確執存したりとの意見は古代に在りて幾分識者の間に勢力有りし所なり (Diog. Laert. ii. 57, iii.

34; Aulus Gellius xiv. 3; Athenæus lib. xi. p. 504; Marcellin. Vit. Thucyd.)。這般の臆測に對する主たる論證は孰れも他を關說す可き充分なる機會を有したるに拘らず、Platon は其著の那れに於ても Xenophon を擧げず、而して Xenophon 亦其著に於て Platon を說くことなかりしのみならず、Xenophon は Platon が「共和國」の最初の二編を閱讀し、之に反對して Cyropædia の稿を起し、而して Platon は Xenophon の行爲に困惑し、機に乘じて Cyrus を說きて彼は勇猛敢爲の人なるも、而も其訓練と統治に於て宜しきを得ざりしものなりと陳べ、而して Xenophon は其 Memorabilia に於て物理的推究に耽るの傾向ありし Platon に對して不信を與ふるが爲に、Socrates が全然他の大多數の哲學者に見るが如く、世界が如何にして發生せるや、而して宇宙間の事象は如何なる必至の法則に由りて生成せるやを推考し萬物の本體を論爭することなく、却て斯くの如き默想の對象を選べる者の愚蒙を闡明するに努めたりと稱したるの事實（Mem. I. i. 11）に存するものなり。然れども Aulus Gellius は是等の論證は彼等の間に確執ありしの事實を立證するに足らずと思惟し、這般の風聞は彼等が學徒の間に起りたる兩者中の孰れが、より賢明にして、より偉大なる哲學者なりやと謂へるが如き自後の論爭より發生せるものなる可く、是に由りて彼等兩哲學者其人の間に猜忌及び惡感存したりと信ぜらるるに至れりと推定するに傾けり（A. Gell. xiv. 3）。されど Menage は兩者間の嫉妬を認め Gellius の見を以て正しからずと做し、Platon の評釋者 Heusde 及び Art 亦同一の意見を有せり（Ad Diog. Laert. iii. 34; Ad Plato, Protag. §91; Ad Plato Republ. i init.）。果して兩者の間に敵意存したりとせば、其原因は那邊に存せしか、古人の間に於て何等の說明も忖度も存することなきなり。

二

以上吾人の知悉し得る彼の生涯は時代の雲翳に覆れながら猶彼が飽迄實務の人たりしを證するに足る可し。而して又彼の著作にして今日に傳存するものに就きて見るに、其範圍の廣大なるは彼が趣味性の實際生活の多方面に接觸せるを示すものなり。「Anabasis」はかの一萬の軍隊が Cyrus の指揮の下に其領域を進軍してより、彼が死後に於ける退却に於て彼等の遭遇したる困難を叙述したるものなり（此書の著者に就きて異說あり、蓋 Xenophon が其 Hellenica III. i. 2 に於て之を以て Siracusa の Thenistogenes に歸せしめたるに始る。而もおそらくは彼が私の理由に基きて本書又は其一部を Themistogenes の名の下に公にせるものなる可しと云ふ）。「Hellenica」は Peloponnesus 戰役の第二十一年なる西紀前四百十年より同三百六十二年 Mantineia の合戰に至る四十八年間に於ける希臘戰史にして恰も Thucydides の記述の盡くる所に始るものなり。「Cyropædia」即ち Cyrus の制度は史上の事實と一致するよりも、寧ろ優良なる政治の典型を示すが爲に Cyrus 其人の敎育及び彼が支配者たるに際し其全領土に施行したる一般の紀律及び命令を述べたるものなり。「Socrates の Memorabilia」は Socrates が有罪の宣告を受けたる二個の嫌疑、即ち自國の諸神を排拒せること、並に靑年を腐敗せしめたりとの事由に對して其先師の人格を辯護せるものなり。「Œconomicus」は農業、農圃の管理及び家計指導の上に於ける主婦の任務並に價値に關する敎訓を記載せるものなり。「Symposium」は八十九 Olympiad の第四年即ち西紀前四百二十四年雅典の富人 Callias の

邸宅に於て其寵倖の美少年 Autolycus が角闘技（パンクレシアム）の勝利を祝するが爲に開かれたる宴會の記述なり。而して對話は Callias, Autolycus 其父 Lycon、Callias の友 Niceratus、Socrates、其友人にして學徒たる Antisthenes、Callias の甥 Hermogenes、Critoの息 Critobulus、Glaucon の子にして Critias の從弟たる Charmides 對間 Philippus 及び Siracusa 人に由りて行はれ、愛情及び友情を以て論題とせり。Athenæus 及び Laertius は Platon 及び Xenophon の兩者中の一方は他を凌駕するの目的を以て Symposium の稿を起せりと稱せるも（Athenæus, lib. xi. p. 504; Diog. Laert. ii 57.）、而も孰れか先きに之を草したるやを言はず、然れども Platon の Symposium 先づ表れたりと一般に推定せらる（Smith's Dict. of Biog. and Mythol., art. Xenophon.）。「Hiero」は Siracusa 王 Hiero 一世と詩人 Simonides との間に行はれたる對話篇にして、就中 Hiero は王者の地位の不自由不滿足不利益を述べ、Simonides は之に對へて其幸福を列擧し、更に王者は出來得る限り其力を公共の利益の爲に使用し、而して其領域の繁榮を增進するが爲に努力す可きを勸告せるものなり。「Agesilaus」は Sparta 王にして、Xenophon の友なる大 Agesilaus に對する頌德の詞なり。「Lacedaemon の政道に就て」は結婚並に兒童及び青年の敎育、成年及び老年に關する制規、共同食事、節酒其他に關する Lycurgus の法制を說き、「雅典の政道に就きて」は雅典人が民主政體を維持するが爲に賢明なる方策を採れること、雅典に於ける遊惰廢頽の風、彼等は其司法に於て正義よりも寧ろ自己に對する利益を顧慮し、其同盟國の間に於ける上流の人民に對して殆ど何等の恩惠を與ふることなく、其財產を沒收し、之を追放致死すること、其同盟者が彼等の訴訟を雅典に於て提起せざるを得ざる所以及び其海事に於ける練達等を叙說せり。以上の兩論文は古人の間に於てさへ、其 Xenophon が眞著たることを疑ふ者なきに非ずと雖、其內容に於て文體に於て彼が其眞著者に非ざるを立證す可きもの存することなし。著者は雅典の政策に對して Sparta のそれを擇べることを顯然たり。「雅典國の收入增加策に就きて」は Attica の國土及び其收入增加の可能性、國家は其保護の下に居留する異鄕民の數を增加するに因りて其收入を增大し得可きこと、商人に對する恩惠賦與及び貿易の增加より期待し得可き利益、Laurium の公有銀坑よりの收益を增加せしむ可き提案、並に收入の維持及び增加に對する平和の必要を論じたるものなり。本書は其內部の記事に徵し第百〇六 Olympiad 即ち Phocis 人が Onomarchus の下に Macedonia の Philip の爲に破られたる西紀前三百五十三年以後に於て老餘の Xenophon が手に成るものなる可しと想定せらる。「Hipparchicus」は騎兵隊指揮官の任務を論じたるものにして、後年雅典騎兵隊に奉職せる其子 Gryllus をして指揮官の資を備へしむるが爲に起稿したるものなりと稱せらる。「馬術に就きて」は馬匹の取扱、選擇及び訓練に關する訓戒を記せるものなり。著者は自己を以て其馬術に關する長き實驗に基き、克く這般の訓言を與ふるの資格ある者なりと思惟せり「Cynegeticus」は狩獵に關する小篇にして之に對する讃美、獵犬の種類品質及び飼育訓練、並に野兎、鹿、猪及び其他の狩獵に關する種々なる方法を說けり。最後の第十三章は本論と何等の關係なき詭辯學者に對する薄弱迂蒙なる攻擊より成るものなるが、こはおそらく Xenophon が眞の作に非ざる可く、他の

箇所に就きても仍疑問存するが如し。

然れども彼も曾てはSocratesを圍繞せる青年の一人なりき。縱令眞率なるも而も窮理的なる天資を有せざりし彼は其師が素樸なる智性と熱烈なる德性の感化を享くること大にして其天才の一層明敏巧緻なる資質によりて化せらるゝこと比較的鮮少なりしと雖、是に由りて吾人は彼が其經濟上の思想に於て實際經濟學者の積極的興味とSocratesの消極的批判との間に逡巡しつゝあるを觀るなり。固より大體に於て彼の實際的傾向は其勢力大にして、そは殊に彼が「雅典の收入」に關する論篇並に彼が全然經濟學に捧げたる一書を著したる少くとも今に傳れる最初の著者たるの事實に顯れたり。（縱令Economicusは今日の意義に於ける經濟學を論じたるものに非ずして、單に家政並に地產管理の技術を說けるに過ぎずとするも、殊に農業上に於ける財富生產の細目に亘り實際的興味を啓示しつゝあるを知る可きなり）。而して他方に於て倫理學者的氣分はEconomicus中に於ける最初の諸章、並にMemorabiliaに於けるが如く、苟もSocratesの感化の感知せらるゝ所に於ては何れも顯著なるものあるなり。Socrates的理想の熾烈なる場合には彼は他の希臘哲學者と等しく經濟學を以て倫理學と混同し、私經濟を以て公經濟と交錯せしめたり。獨立せる一科學としての經濟學の理論は終に希臘に於て發達することなかりき。經濟問題の考察は政治學及び倫理學の研究と同一視せられたり。彼等の學說は彼等が經濟的環境の比較的單一なりしを反映せるものなり。

oikovoμία 及 *oikovoμικη* なる名辭は其の由來に於て又多く其用法に於て共に公經濟よりも寧ろ家屬管理に關するものなり。家內及び公經濟は固と單に規模に於てのみ差違あるものと解釋せられたり（Memorabilia. III. iv. 12, Œconomicus. xx.）。Xenophonは經濟學を以て巧妙なる家長が良く其家產（*οἶκον*）を治むるの道を說けるものなりと做し（Œcon. i. 2, 5, vi. 4）一歌舞隊を指揮するも、一家族、一都市又は一軍隊を指揮するも等しく其成功を見るが爲めには同一性質を必要とするものなりと信じたり（Mem. III. iv. 6）。

III

Xenophonは經濟上の問題を論ずるに當り、一般の希臘思想家と等しく「人」を主とし、「物」を從とせり。彼は所有者に對する效用又は有用性を以て財の必要なる性質たることを力說したるも、而も是を以て先づ外物に附隨せる客觀的性質たる效用を意味することなくして、之を正しく使用し得可き其所有者の能力なりと觀たり。馬匹も土地も之が所有者に對して損害を與ふる場合には其財たるものに非ず。同一物と雖如何に之を使用す可きやを知る者に取りては財なれども、之を知らざる者に對しては財に非ず。（Œcon. i. 7-9.）。物の有する被交換性と雖、買手が其用を解し、而して賣手が對價として收受したる物を有利に使用するに非ざれば如何なる物に對しても價値を確保することなし。即ち財は是に依りて人が利益し得可き物件なり。貨幣と雖、之が用法を知らざる者に取りては彼が財の中に算ふ可きものに非ず。若し或者が妾を蓄ふるが爲に其貨幣を使用し、而して彼女の爲に自己を肉體的に精神的に、而して又家事に於て更に不良なる狀態に置けりとせば、彼の貨幣は全然彼に取りて利益あるものに非ざるが故なり（同 11-13）。而して啻に益友が財たるのみならず、敵軍の如きも之を利用して利益を受くるの道を知悉せる者に對しては財たるなり（同 14-15）。尙吾人は彼が以上の所言に據りて幾分

財の交換價値の觀念を暗示せるを知る可く、而して之を以て需要供給に伴れて變化するものなりと說き、此法則は一の產業が其生產物の供給過多に由りて不利と爲りたる時は勞働者は常に此を去りて他の活動の方面に轉ずる傾向あるの事實に由りて自ら調整するものなりと論じたり。而も彼は銀を以て此法則に對して例外たらしめたり(Rev. vi. 5-10)。

Xenophon は一方に於て富を尊重すること大にして、之が增加及び使用に關する實際的法則を推知せんと試みたるの事實は殊に Œconcmicus に現れたる Ischomachus 及び其妻の物語(同 vi, vii)並に「雅典の收入」に於て窺知するを得可し。而も彼は他方に於て經濟的富と精神的富との間に區別を設け、而して前者を排斥して、人は其財產よりも却て其心性に於て貧富の相違を生ず可きものなるを說けり(Symposium iv. 34.)。

彼は時に經濟上の富(κτῆσις)を以て純然たる主觀的總念と觀じ總て人の安寧に取りて有利なる物と做し、而して有利なる物件とは或人が其使用の道を知れる有ゆる物なりと定義し(Œcon. vi. 4.)或は之を以て單なる比較的の名辭たらしめ、必要以上に出でたる財の餘剩なりとなし、Socrates をして Crito の子なる富人 Critobulus が資產增加の道を問へるに答へて、彼自らは富裕にして Critobulus 其人は極貧なりとの言を作さしめ(Œcon. ii. 2-8.)、又は財帑窮乏して不正事を行ふ君主を以て Demos 中に數へ、有する所勘きも其管理の巧妙なる者は之を富者中に列せざる可らずと稱し(Mem. IV. ii. 37-39.)、更に詭辯者 Antipho との對話に於て自己の淸貧と質素とを辯護して、汝は幸福を以て奢侈と放肆とに存するものと思惟するが如し、而も余は何物をも欲求せざるは神々に准せしむ可きこととにして、而して出來得る限り欲求する所を勘からしむるは最も神々に接近せしむるものなり、神性は至善なり、而して神々に最も近からしむるは即ち至善に最も近からしむる所以なりと叫ばしめ(同 I. vi. 1-10)、或は Hiero の口を藉りて王者は私人に比して富を有すること大なるも其富に對して快樂を有すること少きを歎ぜしめたり(Hiero iv. 6-10.)。富に對する憎惡若しくは冷淡なる態度は又所謂精神的富及び睿智に對する其比較に於て之を窺ふ可く、斯くて犬儒學派(キニーク)の創唱者 Antisthenes をして Callias が貧の誇に次ぎて富の誇を演べしめ(Sym. iii. 8, iv. 34-44.)或は Socrates をして金銀は人を改善せしむること能はざるも聖賢の思想は德を以て其所有者を富ましむ可しとの言を作さしめ(Mem. IV. ii. 9.)、或は Ischomachus をして諸神に對する豐富なる獻納、窮迫せる友人に對する援助並に財帑缺乏の爲に都市をして其美を失はしめざるの注意を行ふの快樂を述べて富者の責任を明ならしめたり(Œcon. xi. 9.)。而も彼は Cyrus の口を藉りて嚴密に正義を尊重して最も多くを獲得し、而して最良の方法を以て最も多くを使用する者を以て最も幸福なる人なりと稱せり(Cyropædia VIII. ii. 23.)。

四

Xenophon が農業に關する明敏なる所論及び雅典國をして其鑛坑の整然たる採掘並に商工業の奬勵に依りて其收入を增加す可きことを熱心に勸告せるは彼が決して經濟的利益に對して無關心ならざりしを示すものなり。彼は時に農業と戰爭とを以て最も尊重す可く且つ必須なる業務なりと觀たるも(Œcon. iv. 4; Mem. II. i. 6.)而も彼が營利の有ゆる手段に對して熾烈なる興味を有したること明なり。(Œcon. ii. 16, iii. 15;

v. 2.; Rev. i. 2., iv., Ath. Pol. ii. 11-16.)。而して彼は產業上の繁榮と成功とが國家をして更に平靜に更に井然たらしむる最良の手段たるを信じたり(Rev. iv. 51.)。彼は又自然的資源又は土地を以て生產の第一要素と看做し(Œcon. v. 2. Rev. i. 2.)、次で勞働の重要なるを認め(同 iii. 11. 15. 16)たり。彼が Memorabilia 中に載せたる犬と羊の物語は其生產機關に關する智識並に雇主對勞働者間の本來の關係に對し幾分の洞察を有せるを證するものなり。即ち Aristarchus 曾て Socrates の忠告に基きて彼を圍繞せる其多數の姉妹女姪及び從妹等の爲に資本を貸入れて機業を開始し、以て其窮迫を免れてより、婦人等が彼を以て安逸にして麪包を食する家內唯一の人なりとして非難するを聽くに及び、Socrates 更に彼に告げて曰く、未だ獸類が言語の能力を有したる時、羊其主に言ひて曰く、汝は汝が土地より得る所の物を除き羊毛小羊及び乾酪を汝に與ふる我等に何物をも與へず、而も汝に對して何等斯くの如き利得を齎すことなき犬に對して汝は汝自ら食する食物の分前を與ふるの不思議なる行爲を爲すものなりと。犬之を聽きて曰く、余は理由なくして之を受くる者に非ず、何となれば余は汝自身をも保護するものなり、汝が人の爲に盜まれず、狼にも奪はれざるは全く余在るが故なり、余にして汝を護らざれば汝は戰々競々として食を求むることすら能はざる可し云々と(同 II. vii. 12-14.)。

彼は又農業を以て爾餘の技術に取りて其母たり保姆たる可きものなりと斷言せり、即ち農業繁盛なる時は有ゆる爾餘の職業は精氣充滿するも、而も土地が荒廢の狀態に存せざるを得ざる時は、爾餘の業務は海陸共に殆ど停止せらるゝなり(Œcon. v. 17.)。而して「方に於て農業を以て最も尊重す可き業務なりと看做し、是を以て戰爭と共に有ゆる他の職業の上に置かる可き權利を分有するものなりと說ける(Œcon. iv. 4.; Mem. II. i. 6.)彼は、他方に於て一國收入の維持及び增加並に其經濟的進步の爲に平和の必要を唱道せり(Rev. v., Cyrop. III. i. 17ff.)。農業は最大の閑暇と肉體的發達とを與へ、而して君主自らと雖、之に從事するの價値あるものなることを小 Cyrus と Lysander との逸話を揭げて主張せり(Œcon. iv. 8-24)。そは有ゆる職業中最も快適に最も生產的に且つ最も品位あるものにして武術及び競技に對する最良の練習たり、愛國心及び正義の訓練に對する最良の學塾たり、而して人類同胞に對する厚情と諸神に對する信仰とを養成するが爲に最大の便宜を與ふるものなり(同 v. 1-16, vi. 9-10.)。洵に農業は敬重す可く且つ氣高き人に取り、人々が據りて以て生活の資を得可き有ゆる職業及び技術中其最良なるものなり云々と說けり(同 vi. 8.)。

Xenophon は經濟的生產が確然たる限界を有するを見たり。利潤の同一率は更に勞働及び資本を不變に增加するに由りて無限に增加せしむることを能はずして、是等のものは最大可能なる收益に比例せざる可らざるを示し、以て報酬漸減の法則を豫示したり。總て農圃を有する者は幾聯の牛並に幾個の勞働者が其土地に取りて充分なる可きやを知るを得可く、而して彼等は必要以上を其耕地に送るを以て損害と思料するなり。而も彼は飽迄銀を以て這般の原則に對し、例外として立つものなりと認めたり。即ち曰く銀の採掘業に於ては總ての人は常に勞働者を欲求しつゝありと稱せらる。有ゆる他の產業に在りては其生產物が低廉と爲りたる時は、之に從事せる勞働者は常に他に轉ずるの傾向あるに拘

らず、銀坑に於ては銀鑛の發掘せらるゝこと愈多く、而して愈多量の銀の抽出せらるゝに從ひ採鑛に從事する者の數は愈大と爲るなり。既に一家の用に取りて十分なる家具を取得せる者は、敢て其以上を購求せんとすることなかる可きも、而も未だ何人も銀の增加を希望せざる迄に其多額を所有せる者なく、而して若し過剩の銀を有したらんには彼等は之を貯藏するに由りて之を使用するに讓らざる滿足を感ず可きなりと（Rev. iv. 5-7.）。

五

Xenophon は自余の Socrates 學派に比し、著しく勞働及び經濟生活に對して好意を有し、而して勞働が天然の資源と等しく生產の重要なる要素たるを力說せり。彼は Socrates が「好運」と「善行」とを對置し、前者を以て求むることなくして其所要のものに逢着するものと做し、後者を以て修練と研究とに依りて善く或物を成就するに在りと認め、而して最も善良にして最も諸神の寵遇を受くること大なる者は農業に在りては其農業上の職責を克く遂行する者、醫術に於ては其醫藥上の職責を克く遂行する者、而して政務に於ては其公の職責を克く遂行する者なり、而も何事をも能せざる者は如何なる目的の爲にも有用なるものに非ず、又諸神によりて納受せらるゝものに非ずと說けりと稱す（Mem. III. ix. 14-15.）。Socrates 曾て被雇仕事に從事しつゝありし Eutherus に向つて其現在の職業が老年に適せざるが故に、他に一層適當なる業務を求む可きを說き、富者の用人たる可きを勸め、彼の事業を管理し、彼の果實を收め、彼の財產を維持するを助けて、彼を利益し、而して彼によりて又利益せらる可きを慫慂す。而して Eutherus が主人に對する隸屬を嫌忌するを言明するに當り、Socrates は更に說きて曰く、國家を支配し、公務を管掌する者と雖、何れか其責任に對する奴隸たらざらんや、而して汝が引受け得可き任務を引受け、汝が成就し得ざるものを拒絕し、苟も汝が身に引受けたるものは之を最善の方法に於て最大なる熱心を以て遂行せんか、汝は其疑懼せる叱責を蒙るの虞最も尠く、其窮迫に際し最も容易に援助を得可く、最も克く危險を免れ得て安易自由の生活を送り、老後の爲に最も良く準備するを得可しと敎へたり（同 II. viii. 1-5.）。Xenophon は「神々は勞働に對して有ゆる財を吾人に賣る。憐れなる者よ、難きを恐れて易きを欲すること勿れ」と言へる Epicharinus の箴言を揭げ、而して又勞作は遙に怠惰に優れるを說き、そは之に從事する者をして一層溫順且つ忠直ならしめ、一層の幸福を致し、而して生活の獨立に對する基礎たるを示せり（Mem. II. vii. 7-12.）。是實に產業に對する强固なる辨明なり、而してそは農業よりも寧ろ先づ工業に對して說かれたるに於て特に注意す可きものなり。遮莫、吾人は這般の主張は曩に引用せるが如く專ら婦人に對して說かれたるものにして、彼等が閑暇の消失は毫も國家の損害たらざるものなることを記憶せざる可らず。

以上の所論に就きて觀る時は、Xenophon が營利業の進步に對する態度は全然近代的のものなりと主張し得可きが如しと雖、而も彼は時に Sparta の立法者 Lycurgus が商工業に依る利得を自由民に禁止したるの事實を擧げたるのみならず（Laced. Pol. vii. 1-2.）、彼と雖、亦上層の市民階級に對し機械的技術を排する倫理的貴族的偏見より脫却すること能はざりき。彼は手工業を以て戶內の坐業に由りて其身心をして等しく軟弱ならしめ、外敵の侵入に對し抗爭力を絕

無ならしむるものなりと做せり（Œcon. iv. 2, vi. 5-7.）。工匠は又其友人若しくは國家の利益の爲に奉仕す可き餘暇を有せず、而して武斷的國家に於ては特に其市民が之に從事することを許す可きものに非ず（同 iv. 3.）。加之、工匠は高尚なる道德的情操を有せざるが故に卑俗下賤なるものなりと做せり（Mem. IV. ii. 22.）。由是觀之、彼は單に商工業の賤務が市民以外の者の手に遂行せらるゝの範圍内に於て其無限の發達を許容せんとせるものなることを知る可し。

Xenophon は實際的なる經濟的見地よりして分勞の原則に到達せり。彼は分勞を以て王侯の食卓上の料理が他に比して其風味勝れるの理由なりと做し、而して小都市に於ては一人をして一職業に依りて衣食せしむるに足る可き充分なる消費者存せざるが故に、分勞は完全に行はるゝことなしと雖、大都市に於ては消費者多數なるが爲に一技術は更に更に分割せられ行くなり。斯くて最も狹き範圍内の勞作にのみ從事する者は最も良く之れを仕上げざるを得ざるが故に、機巧の發達愈大と爲り、而して愈良好なる結果を收め得るに至るなり。即ち彼の所謂分勞は單純なる專業に止らずして複雜なる小分に及び、靴職の例を引きて、或者は單に男靴の製造に、他は女靴に、或者は縫方、他は裁方、或者は上部のみの裁方、他は專ら各部の接合のみに從事しつゝあるを示せり（Cyrop. VIII. ii. 5-6.）。彼は更に軍事上に於ける分勞を述べ（同 II. i. 21.）、而して又分勞の基礎を各個人が資性の相異に求め（Mem. III. ix. 3.）、尚家内に於ける妻女特殊の任務を論じたり（Œcon. viii.）。

六

Xenophon は生產的企業に於ける資本の重要なる實際的地位を認めたりと雖、而も往々之れを以て奴隷の勞働と混同せり（Rev.）。而して彼は何等之れに關する理論を構成することなくして止めりと雖、而も餘剩を存し得るの利益を知悉せり（Œcon. ii. 10.）。彼によりて織物原料の準備の意に使用せられたる ἀφορμή なる文字は恐らく當時雅典の實業家に對して有したる以上の意味を有することなかりしなる可し（Mem. II. vii. 11-12.）。此語は本來出發點（特に戰爭に於ける）を意味したるも、其後或人が一の計畫（殊に企業上の）に着手す可き資源又は財產を意味するに至り、遂て又金融業者の融通資本の意味に移れり。而して Xenophon は往々之を以て公債の意に用ひたり（Rev. iii. 6, 9-12, iv. 34.）。資本に相當する他の希臘語は純然たる使用財を意味する ἀρετή に對し、利子を生ず可き資本の意に用ひらるゝ ὠφελία、享樂せらる可き財 ἀπολαυστικά に對し、收益を生ずる財 κτήματα、純然たる使用に充てらるゝ物件 πρακτικά に對し、將來の生產に供せらるゝ物件 ποιητικά 及び利子又は所得に對する資本の意義を有する κεφάλαιος なりとす。ἔρανος なる文字亦貨幣の出資を意味するに至りしが故に、屢貸附金の意に用ひられ、斯くて貨幣資本に近き意義を有することゝ爲れり。

Xenophon は雅典の收入を增加するが爲に國家事業として奴隷の貸出を行ふ可きを勸說せり。曰く、Niceratus の子 Nicias は銀坑に於て使用せらるゝ一千人の奴隷を有す、而して彼は一人に就き總ての費用を除き、一日一 obolus の約束にて之を Thrace 人 Socias に貸出す。同じく Hipponicus も亦同一率を以て六百人の奴隷を貸出し、一日一 mina の純收入を得。Philemonides は三百を有し一日、半 mina を得。今國家が是等市民の例に倣ひて一千二百の奴隷を購

入する時はおそらく五年乃至六年の間に六千人を降らざるの數に達せしむ可き充分なる收入を生ず可し。此六千人を一人一日總ての經費を控除し一 obolus の割合を以て貸出す時は一年六十 talent の收入を與ふるに至る可し（此計算は一年を三百六十日と看做したるものなり）。而して若し是等の金額の內、單に二十 talent を以て更に奴隷購入の資に充つるが爲に貯藏するものとせば、都市は之が剩餘を其必要と認むる用途に充用し得可く、而して奴隷の數、一萬人に增加したる時は國家に取り一年一百 talent の永續的收入を生するに至る可し云々と（Rev. iv. 14-24.）。即ち彼は何等論理上及び經濟上の問題の含有せられつゝあるを知覺せずして、其儘奴隸制度を認容せるが如しと雖、而も他方に於て常識の問題として奴隸が思遣を以て待遇せらる可きを說き、之に相當の自由を與ふ可きを欲し（Œcon. iii. 4.）、恰も將軍の其部下に對するが如く、公平なる賞罰の制度に依りて之を激勵し、以て彼等が最善の力を致すに至らしめんことを說けり（同 v. 16, xiii.）。而して一家の主人及び主婦は女中頭の選擇に戒心す可く、奴婢が其仕事に對する注意は主婦の周到なる監督に由りて之を得可く、責任の地位に立たしめられたる者の場合には慍情を以て之を遇し、更に進んでは家運の消長と休戚を共にし、或程度まで家計の分擔者たらしむるに由りて其愛着心を大ならしむるを得可しと做せり（Œcon. ix. 11-17.）。加之、彼は又雅典に於ける奴隸の安定なる生活を述べ其原因を倫理上に索めずして寧ろ經濟上の必要に置けり（Ath. Pol. i. 10-12.）。奴隸は固より自由民として生れたる者に取りては最も不快なる狀態なり。されば不幸なる Eutherus が隸屬よりも寧ろ饑餓を選ばんとせること吾人の既に述べたるが如し（Mem. II. viii. 4.）。

七

Xenophon は貨幣が內部價値を有せざる可らざるを以て議論の餘地無き所と認めたるものゝ如く、少くとも銀は其貨幣としての職能と等しく、亦銀としての用に由りて其價値に影響有ることを認めたり。而して彼は又國際貿易上に於ける銀貨の價値を理解せり（Rev. iii. 2.）。即ち雅典の鑄貨は國外に於て流通すること無しと雖、そは如何なる他國の鑄貨よりも純良にして、從て其內に雜分の混入多き有ゆる他の銀の同一量よりも其價値大なるものあるが故に、國外に於て是等のものよりも大なる價値を有す可きを意味せり。固より雅典銀の一定量は同一純分を有する他の銀の一定量よりも正貨として是よりも大なる價値を有すること能はざる可し。Sensus moresque repugnant, atque ipsa utilitas. 吾人が曩に關說せるが如く彼が銀の存在量を無限に增加せんことを牽直に主張したるは、恰も貨幣を以て富と同一視せる極端なるマーカンチリスト流の誤謬に陷れるの觀有るも、而もおそらくは雅典人が銀を以て固定不變の價値を有する金屬として之を尊重する風有りしの事實を其議論の實際的目的の爲に使用したるに過ぎざる可し（Rev. iv. 特に其 7-12.）。

即ち彼は他方に於て貨幣と富との相異を認めたるものゝ如く（Rev. iii. 2.）、又既に引用したるが如く貨幣と雖、其使用を過る時は富に非ざるを論じたり（Œcon. i. 12-14.）。加之、彼は銀の增加をして其價値を低落せしめざらんとせば當に之に應ず可き社會の繁榮並に消費の增加存せざる可らずと做し（Rev. iv. 8.）、且つ彼は貨幣の輸出を以て一國を貧困ならしむるものなりと做せる後世に於ける所謂地金論者流の誤謬に

陷るを免れたるの證左歴然たるもの有るなり（Rev. iii. 2, 4, v. 3.）。彼が銀の産出增加は其價値を減少せしむること無る可く、而してそは貨幣として使用せらるゝ金屬中最も價値の變動少きものなることを示すの必要を認めたるに據りて案ずるに、彼は又貨幣價値の安固を必要とするを明に諒知せるものと見るを得可きか（Rev. iv. 5-11.）。然れども金は其定量の增加に由りて著しく價値を低減し之に對する銀の價格を大ならしむると等しく（Rev. iv. 10.）、又他の貨物が其供給過多に因りて價値を失墜すると等しく（同 5-7.）、銀の價値は主として之が供給に由りて決定せられずして、寧ろ其需要は供給と共に增加す可きを認めたり（同 iv.）。而も上述せるが如く彼が金銀比價の關係に就きて言へる所に就きて考ふるに幾分定量說を諒解せるの觀なきに非ず（同 10.）。彼が他の希臘哲學者に比して遙に貴金屬、殊に銀に對して好感を有したるの一事は何人も疑はざる所なる可しと雖（同 iv. 特に 7-9, 11.）、而も他方に於て Sparta の立法者が其獲得及び使用を制限せることを傳へたり（Lac. Pol. vii. 1-6.）。

Xenophon は國際間に於ける交易の基礎たる天産物の相異及び分業を認めたるも（Ath. Pol. II. 3, 12.）、而も遂に交易の理論を表明することなかりき。然れども彼は交易の增加より期待し得可き利益を說き（Rev. iii.）、愈多數人民が雅典を來訪し、此處に定住する時は愈多量の商貨が輸入輸出販賣せられ、而して愈多額の利益を確保し、愈多額の貢稅を收受するに至る可きを論じ（同 5; Hiero. ix. 9.）、斯くて彼は平和的關係の必要を主張せり（Rev. iii. 4, v, vi.）。彼は單に商業の發達を以て物質的利益を指示するのみならず、等しく社會的及び政治的利益を意味するものなりと觀たり。即ち是に由りて國家の繁盛を來し、庶民は其生活の安易を得、富者は戰費の負擔を免れ、洽く國民の幸福を增加し、斯くて國內に於ける革命の危險を減少せしむ可きが故なり（Rev. vi. 1.）。Xenophon の書中には他の Socrates 學派中に見るが如く貨殖營利の術に對する偏見を包含することなし（Œcon. ii. 18.）。加之、彼の筆に描かれたる Socrates は Critobulus の爲に致富の要道を說きつゝあるなり（同 iii.）、彼は商業上の活動を鼓舞す可き實際的提案に富める者なるが（Rev. iii. 3. 4. 12-14.）就中、彼は貿易商及び船主をして其國內に輸致する貴重なる商貨及び船舶を增加せしむるが爲に、之に一定の保護饗應を與ふ可きを主張せり。而も彼は這般の恩惠を以て獨り雅典の船舶に限定し、又は輸入貿易を制限せんとするの意思を有せざりき。却て彼は奢侈禁止及び國庫收入の目的を以て課せられたる輸出入の兩者に對する貢稅に由りて同市の般富を見んとせり（同 4-5.）而して彼は又大所得を取得す可き源泉として、國家自ら商船を所有し、之を一定の保證に對し商人に賃貸す可きを論じたり（同 14-）。

八

Xenophon は通常社會主義的傾向を有したる希臘思想家中に算せらるゝこと無しと雖、而も彼に於て Platon よりも却て近代社會主義の一面に接近せるものあるを認めざるを得ず。彼も亦 Platon と等しく其時代に於ける公私生活上に於ける個人主義的傾向著大なるを戒め（Mem. IV, iv. 16.）、且つ私有財產に關する社會的責任の感情を表明せり（Œcon. xi. 9, 13.）。彼は「政府は統治者と其性質を等しうす」と稱して（Rev. i. 1.）、Platon 及び近代社會主義者と等しく經濟的若しくは社會的狀態を改造す可き法制の力を過

大觀せること、彼が「雅典の收入」中に表明せる諸計畫の實行可能なるを毫も疑ふことなかりしに徵して明かなる可し。而も彼が產業の社會化に關する近代的學說を主張するに當り、倫理的又は政治的見地よりせずして之を經濟的理由に求めたるは、彼が Platon 及び Aristoteles を超出して近代社會主義者に迫りつゝあるを思はしむるものあるなり（同 iii, iv.）。

然れども是に對する彼の經濟的論據は毫も庶民の幸福と交涉有るに非ず。何となれば彼の提案に從へば、庶民は悉く奴隸たる可き運命を有するものにして、固より彼等に十分なる政治上の諸權利を與ふることを拒みて、雅典の放漫なる民主主義に反對し（Ath. Pol.）、貧窮なる市民及び外人と雖、之を鑛坑に使役せんとせず、却て雅典市民一人に對し三人の割合を以て奴隸を公有し、以て國家の收入を擧ぐ可しと主張せるなり（Rev. iv. 17.）。彼は單に市民の間に於ける貧困を絕滅せんと欲したるのみ（同 33.）。彼は國家が幾多の產業に於て其經營者たる可きを欲したり。國有商船（同 iii. 14.）、奴隸の公有（同 iv. 17.）、鑛坑の公經營（鑛坑は當時既に大部分公有たりしも、而も私人の經營に屬せり）（同 iv.）、鑛坑附近に移住する者に對して賃貸せらる可き公有家屋（同 49.）等は總て其計畫に屬するものなり。富者は這般の企圖に對して出捐せざるを得ざるも、而も其利子として出資額の一割八分、三割五分乃至二十割の利得を得可し（同 iii. 9-11.）。而して鑛業に於ける個人企業の危險を除去するが爲には會社を組織せしむるを得可く、而して是等私企業者の會社と公企業のそれとの間には何等利益の衝突なきのみか、却て鑛業に從事する者多きに從ひ其利得を大ならしむるを得可しと做せり（同 iv. 30-32.）。斯くて貧困は其跡を絕ち、共同の資源に依りて全市民悉く十分なる滿足を得、而して國家に取り繁榮と安定との時代を齎すに至る可し（同 iv. 33, 49-52, vi. 1.）。要之、彼の主張は私有資本は單に其所有者一個の富裕を來すに過ぎざるに反し、國有資本は全市民をして洽く富裕ならしむる上に於て更に多大なる利益を擧ぐるを得可しと云ふに在るものなり（同 iv. 14. 其他）。

從て Xenophon は國家の人口を制限するの必要を見ず、寧ろ其增加を以て彼が計畫の結果として生ず可き利益の一と做し、都市は是に由りて旋て人口頗る稠密と爲り、而して鑛山附近の地は幾許ならずして雅典附近に於ける土地と等しく高價なるに至る可しと主張せるなり（Rev. iv. 50.）。

本稿は專ら Rev. J. S. Watson 譯 Xenophon's Works 並に W (alter) M (oyle) 譯 A Discourse upon Improving the Revenue of the State of Athens. に據り、尙最も重要なる指導と資料とを Albert Augustus Trever の A History of Greek Economic Thought. より得たるものなり。（十月十八日）

經濟價値論（一）

野村兼太郎

經濟學は價値選擇を基本とする文化科學の一として其根本概念が價値論にあることは論ずるまでもない。然るに斯く中心的重要なる概念なるにも拘らず、其價値論たるや紛糾錯雜し其歸趣をすら見出し得ない。遠くは Platon, Heraklit, Xenophon. の昔より近くは Neuman, Marx, Böhm-Bawerk の今に至まで、幾多の學者論客に依つて攻究せられ、而も充分なる解決を與へられないで居る。然らば何故に斯く紛糾するのであらうか？　そも〳〵價値論の根本は何か？